

近年木造住宅は腐朽しやすい。燃えやすいといういわゆる耐久性が乏しいために防災的見地から公営住宅には採用されなくなったことなど年間総建設床面積に対する率はさがりつつある。しかし、木造住宅はその他の特長（建設費が安い、気候風土に適しているなど）によってまだまだ相当量が毎年建設されている。昭和45年度までに1世帯1住戸を目標に政府は毎年住宅建設計画を立て実行しているが、その約60%近くは民間自力建設に期待している。この民間自力建設の大部分はその資金面から見て木造住宅になるであろう。現在は相当深刻な住宅難であるが、その以前に宅地難が厳しく存在している。民間自力建設の相当数は立地条件の悪い都市周辺の低湿地帯に建設される可能性がある。わが国では木材の腐朽は主としてワタグサレダケ (*poria vaporaria*) によって生じる。この腐朽菌の繁殖には次の4項が必要十分条件である。すなわち1. 十分な栄養（木材中のセルロース、リグニン）2. 十分な空気、3. 適当な温度（18~30°C）4. 適当な湿度（相対湿度80%以上）である。この条件が同時に成立すれば腐朽は意外に早く進行し、強度の減少、

変形の増大をきたす。木造住宅の構造・施工の仕方によって柱脚部，床下部周辺の湿度が高くなり，殊に低湿地帯に建設されたものは容易に常時高湿度になる。したがって低湿地帯には木造住宅を建設すべきでなく，やむをえず建設するときは構造・施工に十分注意をして木部周辺の湿度を低く保たねばならない。